

道祖神とともにある暮らし

安曇野には、あらゆる大きさ、形、品質の道祖神が 500 体以上あります。田んぼに囲まれながらいなか道の分岐に置かれているものもあれば、郊外のまちかどに陣取っているものもあります。過去には、新生児を道端の神々にお参りにつれて行っていました。この習慣は現在ではほとんど実践されていません。しかしながら、道祖神は地元の人々の日常生活の一部であり、長い間自然にさらされ風化しながらも敬意と配慮をもって扱われています。時折、簡単に手を合わせるために立ち止まる人もいれば、小銭や花のような小さな供物をおいていく人もいます。

地域によっては、道祖神はさまざまな地元の祭り、特に正月のお祝いにおいて中心的な役割を果たします。安曇野の約 17 か所で今でも維持されている伝統のひとつは、ヒノキと竹で柱を組み上げるというもので、この柱は高いものでは 15 メートルにも達します。これらは色とりどりの吹き流しと頂上に置かれる木の枝で飾り付けられ、解体されるまで 1 週間から 10 日間立っています。

1 月中旬に、いくつかの地域では道祖神の場所で火の祭り「三九郎」が行われ、不要になった正月飾りなどを円錐形に高く積み上げて燃やします。冬の終わりから春の初めに、地元の子供たちは、いくつかの道祖神の像を明るい色で塗り、道祖神は普段の落ち着いた外見とは対照的な姿になります。七夕には伝統的な装飾が施される道祖神もあります。七夕は、伝説に登場する悲運の恋人たちが年に一度、夜空の天の川を渡って再会するのを祝う夏祭りです。安曇野は冬になるとかなりの雪が降ります。年長者の中には、子どもたちが道祖神のそばで「かまくら」とよばれる小さな雪の家を作りその中で遊んだことを思い出す人もいます。（この伝統は今ではみられません）

道祖神にまつわるお祝いの中心が常に子供たちであることは、道祖神が何世紀にもわたって担ってきた守護者としての役割にふさわしく思えます。